

通常は自分ではたらいでつくるか、あるいは他人がつくったものをお金を出して買わなければなりません。とくに、現在の私たちの生活においては、必要な品物を自分で生産している場合はむしろ例外であって、多くの人々は、自分では一種類かまたは少数の品物を生産し、この品物を売ってお金を取り、このお金によって必要な品物を買って生活しているのが普通であります。私たちのくらしは、前にものべましたように、おもてむきは、人によっていろいろとちがったようすをしめしています。が、くらしの基本的なしくみは右のとおりであります。このようなしくみからながめた私たちのくらしが「経済生活」といわれるものであります。結局経済生活とは、私たちの生活に必要な品物を生産したり、その生産に参加してかせいだお金で必要な品物を買ったりするわたしたちのくらしのいとなみをいいます。

もの(財貨) 右にのべましたように、品物は私たちの経済生活の基礎になるものでありますからこのものについてさらにくわしく調べてみましょう。

ものが私たちの経済生活にとって必要なのは、そのものが私たちのいろいろな欲望を満足させてくれるからであります。このものもっている私たちの欲望を満足させてくれるはたらきをもの、の効用といいます。ものによっては、このような効用のないもの、すなわち、私たちの経済生活に直接には役に立たないものがあります。このように、経済生活に必要なものとは、効用をもったものであります。ところが、効用をもっているものであっても、それが自然界に無限にあるため、私たちがわざ

わざ働いてつくったり、お金を出して買ったたりする必要のないものがあります。たとえば、空気などはその代表的なものであります。こういったものは、ありあまるほど自然に与えられているため、欲しいときにはいつでも手に入れることができます。私たちが経済生活においては、とくにとりあげる必要はありません。経済生活において問題となるのは、効用があり、しかもそれが自然には与えられていないか、あってもその数量が限られているため、私たちの欲望をみたすためには働いてつくり出したり、お金を出して買わなければならないようなものであります。私たちの周囲をみまわしてみますと、ほとんどの品物がこのようなものであることがわかります。これらの経済生活において問題とされるものを、一般に「財貨」あるいは「経済財」といい、前にあげた空気のようにお金で買う必要もなく、またとくに働いてつくりだす必要もないものを自由財といいます。

財貨(経済財)のなかには、食糧、衣料、その他の日用品のように、私たちの日常生活において直接的に欲望を満たしてくれるものと、機械や石炭などのように、直接的には私たちの欲望を満足させないで、他の財貨を生産するのに役立つものがあります。前のような財貨を「消費財」後のような財貨を「生産財」といいます。もっとも、同じ財貨であっても、用途によっては、消費財にも生産財にもなることがあります。たとえば、お米は、私たちの食糧となって消費されるときは消費財であり、原料として酒造に使われるときは生産財となっていては消費財ではありません。

収入と支出 財貨をめぐる私たちの生活、すなわち生活に必要な財貨を生産したり、お金で買った

りするくらしが経済生活であることは、すでにお話ししたとおりであります。ところが、私たちの日常の生活をふりかえってみますと、自分に必要な財貨をみずから生産していることは、むしろまれであって、ほとんどの場合、生活に必要な品物は、お金で買うことによって手に入れていきます。このように、お金は私たちの経済生活において非常に大切な役目を果しておりますが、このお金は、ご承知のように、どこにでもころがっているものではなく、私たちが働いてかせがなければ手に入れることができません。したがって、私たちが経済生活をいとなんでいくためには、どうしても働いてお金をかせぎ、このお金によって必要な財貨を買うことになります。一般に、お金を手に入れることを収入といい、お金を払うことを支出といいます。そこで、私たちの経済生活のしくみは、収入によってお金を受取り、このお金を支出することによって必要な財貨を買って使うことであるともいえるわけがあります。

つぎに、私たちの収入について見ますと、大部分は、勤労所得と財産所得とであります。勤労所得は、労働者やサラリーマンが勤め先から仕事の報酬として受取る賃金や俸給のことであり、財産所得は、貯金の利子、家賃、地代などのように、私たちがもっている貯金、家屋、土地などの財産から入る収入のことをいいます。また、支出の大部分を占めるいわゆる消費支出は通常(イ) 飲食費(主食、副食、調味料、嗜好品費など)、(ロ) 住居費(家賃、家屋修繕費、家具費など)、(ハ) 被服費(衣服、身のまわり品、洗濯代など)、(ニ) 光熱費(燃料費、電気、ガス、水道代など)、(ヘ) 雑費(その他の費用、たとえば教養費、娯楽費、衛生費、教育費、交通費など)に分けられています。

私たちのくらしは、右のような収入と支出によっていとなまれておりますが、実際にはこの収入と支出の金額は、必ずしも一致するものではなく、どちらかに過不足を生ずる場合が普通であります。収入の方が支出よりも多ければ、その残りは貯金として蓄えられますが、もし収入以上に支出することになれば、その不足分は、前の貯金を引出すか、他人から借金をするか、とにかくなんらかの方法でおぎなわなければならぬことになります。

くらしの程度(生活水準) このように、私たちのくらしは、収入と支出によってしくまれていますが、この収入と支出のそれぞれの大きさと内容は、人によってまちまちであります。貧乏くらしをしている人からせいたくの限りをつくしている人まで、人によってくらしの程度がいろいろとちがうのは、結局人々の収入や支出の大きさや内容がちがうからであります。このくらしの程度のことを生活水準といいます。人はだれでも、欲しいものがらくに手に入る水準の高い生活をおくりたいと望んでいます。人間の幸福は、物質だけによってえられるものではなく、教養とか道徳とか愛情などのような精神的なものが大切であることはいうまでもありません。しかし、「衣食足りて礼節を知る」ということわざもあるとおり、物質的にゆたかであることも必要であります。ところで、私たちのくらしのしくみは、収入と支出からいとなまれておりますから、私たちの生活水準がどの程度であるかということ、私たちの実際生活における収入と支出の大きさ、とくに支出の内容を調べることによ

て知ることができません。

生活に必要な財貨を買うために支出が行われますが、その支出の中にはどうしても欠くことのできないものと、節約しようと思えばある程度できるものと、全くがまんしてすまずことのできるものがあります。たとえば、食糧費は、少くとも最低生活を保っていただくだけは絶対に必要であり、住居費、被服費、光熱費なども大切ですが、これに対して、娯楽費、交際費などは、なくてもある程度はがまんできるものであります。したがって、収入の多い人は、食糧費を支払ってもなお収入に余裕があるために、娯楽費や交際費などに多くの支出をすることができ、さらには貯蓄することさえできますから、毎日ゆたかな程度の高いくらしをすることができます。これに対して、収入の少ない人は、食糧費に支出した残りが少く、食べるだけが精一杯ということになって、程度の低いくらししかできないこととなります。

ドイツのエンゲル (Ernst Engel プロシヤの統計学者一八二二年—一八九六年、「ベルギー労働者家族の生活費」の著書がある) という人は、このような収入や支出と生活水準の關係に興味をもつて、たくさん労働者の家計について調べた結果、「家計が貧しければ貧しい程、収入のなかから食糧費として支出する割合は、支出総額に対して大きくなる」という、エンゲルの法則といわれているものを発見しました。この支出総額のうち消費支出に対する食糧費の割合を百分比 (パーセント) でしめたものをエンゲル係数といっています。この法則が正しいとすれば、私たちのくらしの程度の主要な面をし

めず生活水準は、一応このエンゲル係数によってもはかることができるわけであります。

二 世帯と企業

世帯のいみ 私たちのくらしのありさまを見ますと、一人だけでくらししている人はまれであり、ほとんどの人が親子、兄弟などの家族やそのほかの親しい人達と一緒に一つの家庭をつくって、共同生活をいとなんでおります。したがって、私たちの経済生活も、収入と支出からしくまれていっているとしても、一人一人の収入、支出ではなく、実際には、家庭という共同生活についての収入、支出によっていとなまれております。家庭を、このように、経済生活の単位 (経済単位) としてながめたものを世帯といえます。このように、私たちのくらしは、この世帯をかたちづくって行われ、世帯の収入、支出によっていとなまれていきますから、経済生活の本当のすがたを知るためには、この世帯のはたらきをよく理解することが必要であります。世帯は、私たちのくらしのよりどころであり、いわばくらしの場所でもあります。私たちの生活に必要な食糧、被服、住居、そのほかいろいろな財貨は、世帯で共同に購入します。そこで、世帯は、私たちの消費生活の場所であるということもできます。しかし、世帯は、消費生活だけをいとなむものではなく、その反面に消費生活をするために必要なはたらきをもいとなんでおります。消費生活に必要な財貨を購入するためには、お金が必要であることは当然でありますから、世帯に収入があつてはじめて消費生活をいとなむことができるわけであります。

すなわち、世帯は、消費生活の場所であると同時に収入を手に入れるためにはたらきをもいとなんでおります。私たちの家庭で一家そろって楽しい夕食のぜんじつということは、世帯の消費生活であります。これができるのは、父や兄が会社や役所につとめたり、田畑をたがやしたり、魚をとったり、あるいは家で商売や工場をいとなんで、収入をえるか、家庭に土地、家屋、貯金等の財産があつて、それから、地代、家賃、利子などの収入がはいってくるからであります。

職業と企業 世帯は、どのようにして収入を受取り、またその収入はどのようにして生れてくるものでしょうか。みなさんの家庭を考えてみて下さい。みなさんの家庭では、一家の生活をささえる収入を手に入れるため、家の人がなんらかの職業についておられることでしょうか。お百姓さんや漁師のように田畑をたがやしたり、魚をとったりしている人、労働者やサラリーマンや会社の重役などとして勤め先から給料をもらっている人、家で商売や工場をいとなんでもうけている人、あるいは医者、弁護士、学校の先生をしている人など、いろいろな職業が考えられます。このように、人々はそれぞれ職業について働いて、収入を手に入れてるのであります。結局それらの収入は、従事している職業の場所、すなわち職場から受取っているわけでありす。それでは、職場は、どうして人々に収入となるべきお金をはらうのでしょうか。今度は、職場というものをよくみて下さい。勤め先である職場はどの職場にしても、必ずなんらかの財貨をつくったり、あるいは人々にサービスを与えています。ここで、サービスという言葉がでてきましたから、簡単に説明しておきましょう。私たちが病氣

にかかったときや、勉強をする場合には、病院や学校へ行かなければなりません。お医者さんは病氣をみてくれますし、学校の先生はいろいろなことを教えてくれます。そして、そのおかげで、私たちは、病氣をなおしてもらったり、知識をえたりして、その場で一種の欲求の満足をえることができます。この場合の、職場におけるお医者さんや学校の先生のはたらきをサービスといいます。

職場のうち、農業、林業、水産業、工業、鉱業、建設業、製造業などは財貨をつくっている職場であり、商業、金融業、運輸業、サービス業（医者、弁護士、教員、旅館、下宿業など）などは、人々にサービスを与えている職場であります。

ところで、職場では、社長、店主などを中心として、幾人かの、ときには非常に多くの人々がやとわれており、それらの人々は共同して働くことよって財貨をつくって売ったり、人々にサービスを与えたりして、もうけ（利潤）を生む機能を果しています。このように、職場は、人々が世帯から出てきて共同に働く場所であり、職場でつくられた財貨やサービスは、共同の働きによつて生まれたものでありますから、結局その財貨やサービスは、大きっぱにいつて、職場で働く人々に、その働きのかたちや程度にしたがつて、その報酬として分けられることとなります。世帯が収入として職場から受取るお金は、このような職場における働きの報酬として分配されたものであります。なお、ここで注意していただきたいのは、人々が職場の活動に参加する場合には、その職場の従業員として、直接に肉体的あるいは精神的な労働によつて参加するばかりでなく、身分的には職場の職員でなくても、

その職場の活動に必要なお金(資本)や土地、家屋などの財産を提供することによって参加することもあるということがあります。この場合、それらのお金や土地、家屋などは、それぞれ職場の活動を助け、もうけをえるもとで、もたっていますから、職場は、このような財産の提供に対しても報酬を支払うわけがあります。これらの財産の提供者は利子、地代、家賃などのかたちで報酬を受取ります。結局、人々は、職場で直接働いてその勤労に対する報酬として所得を受取るか、あるいは職場に財産を提供してその財産に対する報酬として所得を受取りますが、これらの所得が、収入として世帯に入り、世帯における私たちのくらしのもとで、に使われているのであります。

このように、職場は、私たちのくらしの場所である世帯とは切っても切れない深い関係にあるわけでありませんが、また世帯とは全然別個のものであって、それ自身の独自の目的としくみをもって活動しております。世帯は私たちのくらしの主体であります。これに対して、企業は、私たちの働く場所である職場を私たちに提供し、財貨をつくりたりサービスを与えたりする機能をいとなむ一つの経済単位であり、経済の主体であります。世帯と企業とは、密接な関係にありながら、別々のはたらきをもっていきます。したがって、私たちの経済生活をよりくわしく研究するためには、たんに世帯のしくみだけでなく、職場としての企業のはたらきを十分にしらべることが必要であります。企業のはたらきについては、「第三章 企業のはたらき」のところでもくわしく説明いたしますから、ここでは、世帯と企業との関係をよく理解して下さい。

消費と生産 世帯は、くらしの場所として生活に必要な財貨やサービスを購入しますが、その購入のもとでとなるお金を職場としての企業から収入として受取ることとは、いままでお話したところでおわかりのことと思います。ところが、世帯と企業との間には、このような世帯の収入という、お金の面を通しての関係ばかりでなく、そのうらはらとして、財貨やサービスを通じても密接な関係があります。

世帯の人々は企業で働いていて収入をえ、その収入で生活に必要な財貨を買って消費するわけですが、世帯はこの生活に必要なサービスをどこから買い、さらにだれがこれらの財貨をつくり、あるかを考えて下さい。すでにお話したことによって、それは企業であることはすぐおわかりになるでしょう。すなわち、財貨をつくりたり売ったりあるいはサービスを与えたりするのが企業のはたらきであります。世帯は、企業を職場としてそこで働き、共同して財貨やサービスを生産するとともに、また企業から財貨やサービスを購入して消費していることになります。したがって、世帯と企業とは所得(収入)というお金の面だけでなく、財貨やサービスという面でも密接な関係にあり、この面からみて世帯を消費の場所とすれば、企業は、生産の場所ということができるわけがあります。後でお話するように、人々が生活に必要な財貨やサービスをすべて家庭のなかでつくっていたような大昔では、消費の場所と生産の場所は一つであったわけですが、分業と交換の発達した近代の経済では、家庭で財貨やサービスを生産することはきわめてまれであり、生産の場所としての企業

が家庭から独立し、家庭は、たんに消費の場所としての世帯となつてゐることが、大きな特徴であります。したがつて、近代における私たちの経済生活のしくみを知るためには、世帯とともに企業の、消費とともに生産のしくみとはたらきを十分にしらべることが必要であります。

三 経済生活の発展

経済生活と文化 私たちのくらしのしくみは、人間の生活の一部面でありますから、文化の発展にもなつて、歴史的に発展してゆくことは当然であります。私たちのくらしのしくみの発展が、逆にまた人間文化の発展の原動力ともなつてきました。したがつて、経済生活の発展のあとをたどることによつて、文化の発展のすがたを知ることが出来るわけがあります。「経済は、生きものである」とよくいわれるのは、このような意味からあります。要するに経済生活も一つの生命をもち、人間の生活とともに生長していくものでありますから、いままでの人間のいとなんできた経済生活の長いあゆみをたどり、その進歩のすがたをしらべてみることは、近代における私たちの経済生活のしくみを理解するうえにもきわめて大切なことでもあります。

自給自足の経済生活 私たち人間の古い時代の経済生活は、自分で消費するものを自分で生産するいわゆる自給自足の経済生活でありました。もつとも、一口に自給自足の経済生活といつても、文化の発達にもなつて、いろいろな段階がありました。最も古い原始的な生活状態にあつた私たちの祖

先は、自分たちの生活に必要なものを道具を使って特別に生産することを知らなかつたので、野や山で鳥やけだものを捕えたり、川や海で魚や貝を採集したりして、生命を保つておりました。このように、当時は、生活に必要な財貨を特別に生産することをしないで、たんに自然に与えられていたものを採集して生活していたのであります。人間は、何十万年かの間、このような自然採集の経済生活をつづけていました。しかし、このような自然のものを採集する生活は、どうしても食糧のあるところを求めてさまようことになりまますから、人間の生活は、全く自然に左右されて、きわめて不安定でありました。

そこで、人間は、いろいろとちえをしぼつて工夫し、石器や土器による簡単な道具を發明して、生活に必要な身のまわりのものをつくり出すとともに、農業技術をおぼえて、食糧を自分で生産するようになりました。この道具と農業技術の発達によつて、人々の生活は、みちがえるほど豊かになり、今までのように、食糧を求めて移住する必要もなくなり、農耕に適した土地に定住し、そこに共同生活をいとなんで、次第に文化を発達させていきました。このようにして、自然採集の経済生活から、農耕などを主とした経済生活へと進んだわけでありますが、しかし、この時期においても、人々は、自分たちの生活に必要なものは、すべて自分たちの共同社会のなかでつくり、これらの共同で生産したものは、みんな共同で所有し、自給自足の生活をいとなんでおりました。

分業と交換の経済生活 このようにして、人間の文化が次第に発展していくにつれて、人々の必要

と欲望もますます大きくなり、自分たちだけの限られた生産の力では、とうていこの欲望を十分に満足させることができなくなりました。そこで、人々は、道具を使って新しい便利なものをつくることに工夫をこらし、また牧畜、農耕、その他いろいろな仕事については、それぞれ専門の人々が手分けしてあたるようになり、また、人々は、おたがいに自分の生活に必要な品物を交換しあうようになり、また、その内容をゆたかにしていききました。

しかし、分業と交換の経済生活も、現在のように高度に発達したしくみになるまでには、やはり長い長い歴史がありました。最初は、山や海からけたものや魚をとってきた人が、これを農業をしている人の農産物と交換するといったぐあいの、いわゆる、物々交換の経済の時代でありました。ところが、物々交換では、交換し合う相手を見つけ、しかも相手が自分の欲しいものを持っていないければなりません。このような都合のよい相手をみつけることは、なかなか困難なことでありましたから、やがて人々は、交換をするために一定の場所をきめて集まるようになりました。人々がおたがいに交換したいと思う財貨をそれぞれ持って大勢集まることは、手数の点からいっても、品物を自由に選ぶことができる点からいってもきわめて便利なことでありました。このような交換の場所としてきめられたところが市(市場)とよばれ、交換経済は市場の経済として発展していききました。

このようにして、いままでの自給自足による限られたせまい範囲の経済生活から、財貨の交流によ

る広い地域への経済生活へと進むことができるようになりましたが、そのうちに、交換の範囲や方法、数量などについてしたいに不便を感じるようになり、また、たとえば、米を持っている人が、織物と交換したいと思って市場に出むいても、運わるく織物を持っている人は米が欲しいのではなく、毛皮が欲しいと思っていれば、これをおたがいに交換するわけにいきませんから、欲しい織物を手に入れることができません。また、おたがいに、品物は交換したいと思っても、米の何升と織物の何反とを交換したらよいかという数量の点で、おたがいの希望が合わないために、交換のできない場合もあったでしょう。

そこで、このような不便をとり除くために、人間がいろいろと工夫して考え出したものが「お金」(貨幣)であります。お金は、いつでも、他のどんな品物とでも交換できますし、またもののねうち(価値)をはかる物指しとすることもできるものでありますから、これだけでもって市場にいきさえずれば、おたがいに欲しいものをいくらでも手に入れることができるようになって、交換は、何の不便もなく広く自由に行われるようになりました。このようにして、経済は、物々交換から「貨幣経済」の時代に進んだわけです。もっとも貨幣といっても、最初から今日のような「金属貨幣」や「紙幣」が使われていたのではなく、時代によって、いろいろなものが貨幣の役目を果たしていました。最初は、貝、石、小麦、稲などの物品が、それぞれ貨幣として使われていましたが、このような「物品貨幣」では、持ち運びや保存、あるいはこまかく分けることなどに不便があったので、いろ

いろ工夫した結果、このような不便のない金属の貨幣が発見されました。現代では、さらに紙幣もあります。

このように、便利な貨幣が社会にいきわたって流通するようになりますと、分業と交換がますますさかんになり、生産、消費のしくみははじらいにとのえられていき、生産者と消費者の間の財貨の交換のなかだちを専門の仕事とする「商人」が生まれました。商人は、生産者から財貨を買取り、これより高い値段で消費者に売って、その差額を自分のもうけとするわけであり、このような商人の発生によって、「商業」という企業が次第に発達し、商業の発達によって、その中心地としての「都市」がかたちづくられるようになり、私たちの消費生活は都市を中心に行われるようになりました。商業の発達は、このように、私たちの消費生活に大きな影響を及ぼしたばかりでなく、さらに、財貨をつくる生産のしくみをも変化させるようになりました。すなわち、貨幣の流通にもなって、ものを生産するもととなる道具や原料は、貨幣によって買わなければならないようになったわけであり、このためには、まず多額の貨幣を手に入れる必要があります。

ところが、商業の発達につれて、多額の貨幣を集めることができたのは、商人、とくに問屋であります。そこで、問屋は、自分の持っている貨幣で原料や道具を買求め、これを財貨の生産を仕事とする人たちに貸与えました。当時の生産者は、今日の工場のように、大規模な機械や設備を持っていたものではなく、簡単な道具を使い、主として、自分の手のはたらきでものをつくっていましたが、

手工業者といわれていますが、このような手工業者は、まったく問屋にやとわれて働くようなものでその製品も問屋の手で販売されて、利益もほとんどひとり占めされておりました。

このようにして、貨幣の流通にもなって発達した商業は、さらに「問屋制手工業」のかたちで工業を発達させ、多くの財貨が生産されるようになりました。しかし、問屋制手工業では、手工業者たちが各地に分散しておりましたから、生産には多くの不便がありました。そこで、生産の能率をあげるために、共同の仕事場(工場)に集まって、分担して仕事をするようになり、工場制度がみられるようになりました。もっとも、当時の工場制度は、まだ今日のように機械は発明されておられませんから、あくまでも人間の手の延長である道具を使っての手工業でありました。この時代の工業は、「工場制手工業」といわれています。しかし、こうした工場制度ができあがったことは、生産のしくみばかりでなく、社会生活のうえにも大きな変化をもたらしました。それは、農村から多くの若い人たちが、工場のあるところを集まり、工場にやとわれて賃金をもらう労働者になっていったことであります。

近代的な經濟生活 工場制度の発達によって多くの財貨が生産されるようになりましたが、一方交通の発達につれて、物資の取引の範囲もますますひろまり、さらに多くの財貨が要求されるようになりました。ところが、工場制であっても、生産の方法が、人間の手の延長である道具を使用するにすぎない手工業の段階にある限り、いくら一所懸命働いても、財貨の生産量には限りがあり、とうてい

多くの注文には応じきれぬものではありませんでした。そこで人々は、当時めざましく発達しつつあった科学のあらゆる分野における知識をとりいれて、ついにいろいろの便利な動力や機械を發明し、従来の手工業から、「機械工業」に移っていったのであります。

こうして、手工業から機械工業へ移ったことによって、今までの生産のしくみが根本的にかわったことは、人間の経済生活全般にも大きな影響を与えることになりました。当時のこのような生産のしくみの大きな変化を、「産業革命」とよんでいます。この産業革命は、最初十八世紀の後半イギリスにおこり、ついで十九世紀に入ってからヨーロッパやアメリカにもみられ、その後日本をはじめ世界の各国に及んでいきました。産業革命は、私たちの経済生活の歴史のなかにおいて、最も重要な出来事のひとつであって、これをさかいとして私たちの経済生活は大きく変化し、近代化されていったのであります。すなわち、たとえば機械生産の方法によって、分業が能率的に行われるようになった結果、おどろくほど多種多量のものが安く生産されるようになってきました。また、汽車、汽船などの發明、製造は、世界各地の交通を便利にしましたから、経済生活の範囲も世界的な規模にひろがっていきました。産業が盛んになり、生活水準が高まってくるにつれて、人口が急速に増え、しかも人々は工場が集まっていて働き口のある都市に集中したため、都市の人口は非常に増加し、この都市を中心に商業もますます盛んになりました。なおまた、機械を使いこまかい分業のおこなわれる生産のしくみでは、必ずしも熟練した技術を必要としなくなったため、工場で働く人々は、これまでの道具を

使う職人の立場から、逆に、しだいに機械に使われて働く労働者となってきたのであります。

産業革命の結果、私たちの経済生活には、このような大きな変化があらわれ、しだいに自由企業を中心とした「資本主義経済」といわれる「近代的な経済」が確立されていきました。このような機械による大規模な生産のしくみでは、多くの設備、機械、原料や多数の労働者を必要としましたので、それをまかなうだけの貨幣が必要となります。このようなもとで、となる多くの資金、つまり資本を持つている人たちだけが、このような生産を行うことができ、実際に働く労働者は、ただ賃金をもらって働くだけになります。また、企業は、もうけることを目的として生産をするため、彼らのあいだでは、お互いに自分のもうけを少しでも多くしようと競争するようになり、いわゆる自由競争が行われます。この自由競争の結果、生産のしくみは、さらに多くの財貨が能率的に生産されるようなくみへとますます発展していきます。また、商業やその他いろいろな産業の分野においても、企業は、その資金の力をもって、多くの財貨を取扱うようになっていきました。このように、近代の経済生活においては、資本が大きな働きをいとなみますから、他方では、資本の欲しい人に資金を貸して、利子をとる職業が発達してきたことは当然であります。この種の職業は、後に自分のお金ばかりでなく大勢の人のお金を集めてこれを貸付ける銀行に発展していきます。

これらの金融機関の発達によって、ますます多くの資本が集められるようになり、産業は、いよいよ大規模に発展していくこととなります。このように、自由近代の産業を動かしているものは、資本

をもとでとした自由企業でありますから、この意味で、近代の経済は、自由企業制経済あるいは資本主義経済ともいわれているのであります。工業、商業、その他いろいろの産業をいとなみ、もうけをあげる組織が、前にもお話ししました企業であります。この企業経営が、大規模の資本によって行われているところに、近代経済生活の特色があるわけでありす。そして、世帯をつくって生活している私たちは、このような企業にやとわれて働くか、あるいは資金や土地、建物などの財産を提供することによって、企業活動に参加し、企業からそれらの報酬を所得として受取り、この所得によって、企業の生産した財貨を購入して消費生活をおくっているのであります。

第二章 世帯の収支

いままでのところで、世帯は、国民経済の一単位であり、私たちのくらしの主体であって、主として消費の場所であり、また職場を通じて企業の生産とも密接な関係にあるということがはっきりしたと思ひます。

そこで、つぎにこの世帯の収入と支出について、さらによくわしく調べてみることにしましょう。

一 世帯の構成

世帯のありさま 世帯が、親子、夫婦、あるいは親しい人などくらしをともにしている人々の集りであることは、前にもお話ししたとおりですが、まれには、身寄りがなくてただ一人でくらしをたてている人もおります。このような世帯の数は、日本全国で約一千六百万もあります。つぎの第1図は、昭和二十五年十月に行われた国勢調査の結果であります。これによれば、全世帯の約四分の一は家族人員七人以上の世帯であり、全人口の約四〇％は、このような大家族で生活をしていることとなります。また、全体の約九十万人は、ただ一人でくらしをたてていることがわかります。

この総世帯のうち、農業をいとなんでいる農家世帯は約六百万戸で、ほぼ全体の四〇％にあたり、